

2 野 菜

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 施設果菜類の管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○施設果菜類の管理 ○露地野菜の管理 ○ハウスの雪害対策 <p>きゅうり、トマトなどのハウス栽培では、低温と日照不足により草勢が低下しやすい。春先からの減収や品質低下を防ぐには、厳寒期の着果負担を軽減させる対策や草勢管理が重要となる。</p> <p>ア 追肥・摘果</p> <p>この時期は地温が低いことから、肥料の吸収が悪く、一度に多くの追肥を行うと根傷みを起こす恐れがある。追肥は草勢を見ながら、硝酸態チッ素主体の速効性肥料を少量で多回数（チッ素成分で1～2kg/10a程度を約7日間隔）を基本とし、地温の上昇する午前中に、かん水を兼ねて液肥等で施用すると効果的である。併せて、変形果を中心に摘果を行い、着果負担の軽減に努める。</p> <p>イ 採光の改善</p> <p>果菜類の光飽和点（光合成量が最大になる時の光の強さ）は、きゅうりが4～6万ルクス、トマトが約7万ルクス、イチゴが2～3万ルクスであり、生育や収量の向上を図るには、光飽和点近くの強い光が連続して当たることが望ましい。この時期は日射量が少なく日照時間も短いため、晴天時は光合成が盛んな午前中を中心に、可能な限り内張りを開放するなど、ハウス内の採光に努める。</p> <p>イチゴの高設栽培では、光反射シートの設置により、果実の着色向上、収量増加が期待できる（写真1）。</p> <div data-bbox="547 1624 1038 1989" data-label="Image"> </div> <p>写真1 イチゴの光反射シート</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 露地野菜の管理</p>	<p>ウ 換気・炭酸ガス施用 この時期はハウスを密閉することが多いため、午前中はハウス内の炭酸ガス濃度が低下しやすく、光合成を行う上での制限要因となる。このため、晴天日の午前中は、短時間でも換気を行って外気を取り入れ、ハウス内の炭酸ガス濃度の低下を防ぐ。炭酸ガス発生機を用いて9～15時まで、炭酸ガス濃度を400～500 ppmに維持する。</p> <p>エ 病害対策 厳寒期のハウス栽培では、多湿条件により灰色かび病が発生しやすいため、晴天日には換気を行う。併せて、咲き終わった花卉や発病葉・発病果を除去し、同一系統の薬剤の連用を避けて適宜薬剤を散布するなどの対策をとる。</p>
	<p>ア トンネル栽培の温度管理 トンネル栽培では夜間の温度確保が困難なため、午後の早い時間帯にトンネルを閉めて夜温を確保する。穏やかな天気が続き、夜温が高い場合は日中の換気を十分に行い、トンネル内の温湿度を低めに管理して軟弱徒長を防ぎ、耐寒性を高める（野菜の生育適温については1月号を参照）。</p> <p>イ 施肥及びかん水 植物は、体内の栄養状態が良いほど耐凍性が強まるため、低温期に肥切れさせないように努める。キャベツなどの結球野菜では、外葉の形成期と結球期に養分吸収が最も盛んに行われるので、結球始期にチッ素・カリを各成分で4 kg/10 a 施用する。かん水はやや控えめとするが、葉の光沢が悪くなるまで水分が不足すると、収量や品質の低下を招くので、土壌の乾燥が続くそうであれば暖かい日を選んで午前中にかん水する。</p> <p>ウ 排水と保温対策 降水により溝に水が溜まったままの状態にしておくと根傷みの原因となる。根の活性を維持するため、排水溝のさらい上げなど、排水対策を講じる。また、葉根菜類の生育促進のため、保温資材をベタがけするなど株周辺の保温に努める。</p> <p>エ そらまめの誘引準備 そらまめは、生産力の高い分枝を残し誘引していくことが高収量につながる。L字仕立ての場合、2月上中旬に一株当たり5本程度の分枝を選び、それ以外の分枝は除去する（写真2）。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(3) ハウスの雪害対策</p>	<p>選定する分枝は①昨年末までに発生したもの、②大きく勢いのあるもの、③節間が詰まり充実したもの、④誘引しやすい向きに伸びているもの、とする。選定した分枝は一段目のひもに誘引し、その後の伸長に合わせて二段目以降のひもを張っていく（写真3）。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="480 551 919 884"> </div> <div data-bbox="948 551 1393 884"> </div> </div> <p>写真2 分枝の選定と整枝 (数字1～5：残す分枝)</p> <p>写真3 分枝を一段目のひもに固定したそらまめ</p>
	<p>ア 雪害発生の要因</p> <p>本県の雪質は寒冷地に比べ湿雪であり、ビニルの表面に付着しやすい。特に、南岸低気圧によって冬の終わりから春先にかけて降る雪は、積雪1cmで2～3kg/m²の重さとなる。</p> <p>パイプハウスは比較的屋根の勾配が緩やかなため、雪が滑り落ちにくく、一夜のうちに10～20cm以上の積雪があると、雪の重量でハウスが潰れるリスクが高まる。また、比較的降雪量が少なくても、風の影響で屋根の片方に集中的に積雪することでハウスのバランスが崩れて倒壊する恐れがある。</p> <p>イ 雪害対策</p> <p>積雪が予想される場合には、強風対策に準じて補強支柱等によりハウスを補強する（写真4）。</p> <p>暖房設備があるようなら内張りを開放し、設定温度を高めにして加温し、積雪を滑り落ちやすくする。</p> <p>雪が止んだら、屋根上の積雪はできるだけ早く除雪する。特にビニルがたるみ、雪の滑落が進まないときはすみやかに雪降ろしをするとともに、次の積雪に備えて施設各部の損傷や緩みの有無等を点検する。</p> <div style="text-align: right;"> <p>写真4 筋交いによる補強</p> </div>

(作成 農林水産研究所)